

東北大学機械系 同窓会ニュース 第13号

東北大学機械系同窓会
〒980-8579
仙台市青葉区荒巻字青葉6-6-01
東北大学工学部機械知能・航空工学科内
電話：(022) 795-6926
FAX：(022) 795-6926
E-Mail：dousou@mech.
tohoku.ac.jp
ホームページ http://www.mech.
tohoku.ac.jp/dousou/
郵便振込口座
番号 02270-8-11176
名称 東北大学機械系同窓会
印刷 東北大学生協同組合

JAXAとの組織的連携 協定の調印と連携講座設立

同窓生の皆様に機械系の現状を報告いたします。昨年紹介いたしました機械系の新しい教員制度は、予定通り平成十九年度から開始され、まもなく一年が経過としております。この新制度の詳細は本号の記事「分野内独立研究室体制について」の中で詳しく紹介されておりますので、ぜひ一読ください。一方、同じく平成十九年度より、それまで異なる委員会等で運営されていた機械系の広報、オープン講義、出前授業あるいは機械系ホームページ更新などが新設の広報推進室に集約され、早速戦略的な広報活動が展開されております。「機械系広報推進室の開設」で詳しく紹介されております。こちらもぜひご覧ください。

さて、既に本学のホームページや新聞等で紹介されておりますが、東北大学は平成二十年度より医工学研究科を新設します。工学と医学の融合はさまざまな大学機関で試みられていますが、研究科の新設による組織的な展開は我が国初であり、各方面から大きな期待が寄せられています。機械系からはバイオロボティクス専攻より四名の教員が医工学研究科に参画します。医工学研究科の設置と機械系の参画は、本号の記事「我が国初の医工学研究科—平成二十年四月より発足—」の中で詳しく紹介されております。

組織的な連携協定締結の機運が高まり、本学は庄子理事研究担当の指示により産学官連携推進本部がJAXA側の担当部署との調整を進め、平成十九年八月三日に組織的連携協定が調印されるに至りました。この組織的連携協定では、研究開発や教育・人材育成等の幅広い分野での連携が謳われており、大学院連携講座の設置が大きな柱の一つに据えられました。機械系では議論を重ね、航空宇宙工学専攻にJAXAとの連携講座を設置し、JAXAの現役研究者二名を教員として迎え、大学院学生の研究と教育に携わっていただく予定です。

分野内独立研究室体制について

平成十九年四月に施行された学校教育法一部改正により導入された准教授、助教という名称は、既に新聞やテレビでご覧になられたかと思いますが、この改正は、若手教員の自立性を向上させ、優れた若手教員が教授から独立して活躍できることを目指すものです。従来の教員の職務内容に、教授が「学生を教授し、その研究を指導し」、又は「研究に従事し」、助教が「教授の職務を助け」とあり、教授、助教、助手が一つの研究室を構成して、学生の教育と研究に当たってきました。今回の改正で導入された准教授や助教の職務内容は教授と同様で、知識・能力・実績のみに三者の差があるとされています。

この改正に対応して、機械系は「若手教員の自律性と研究上の自立性向上」を目指すと共に、「若手教員の育成」と「専門科目教育の責任」にも留意して、平成十九年四月から新しい体制をスタートさせました。以下にその概要を紹介いたします。

既にテレビ・ラジオ等のニュースでご存知のこととは思いますが、我が国で最初の医工学を専門とする新しい研究科が本年四月から東北大学に発足することになりました。

これまで東北大学では工学部と医学部の研究者が協同して新たな医療機器開発や医学・生物学の問題に取り組んできております。古くは大正十四年にさかのぼりますが、工学部の坂山平一教授と医学部の佐藤彰教授が真空管式高音聴診器を開発してあります。その後、超音波による心臓の断層像の撮影、X線CTの原理の提案など、世界に先駆けた医工学研究が行われてきました。

機械系においては、国立大学機械系で全国に先駆け平成三年四月から機械電子工学科の中に医工学関連の二分野が発足しました。また、機械系の改組により平成十五年四月にはバイオロボティクス専攻が発足し、生体医工学関係の研究と教育を先導してきました。この時をほぼ同じくして、平成十四年には、文部科学省の二十一年次COEプログラムに「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEプログラムでは、二十一年次COEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

信するシステムを築き、交流の実を挙げます。

研究では、ナノ・マイクロレベルの生命現象を対象に、工学的手法を用いて生理現象の解明、生体操作、機能修復などを図る工学技術の開発を目指します。ナノ・マイクロレベルの生命現象として最も重要な対象は、細胞および細胞内の小器官、さらには細胞外マトリックスなど、長さのスケールが数十から数一〇〇ナノメートルの構造とその機能です。生命の統合性が問題になるこのレベルでは、生命体の複雑な構造と機能が一体となって生命機能が維持されます。ナノ医工学は、このような認識のもと、具体的な臨床医学・医療への応用を視野に入れた生命現象の解明、構造の

可視化と観測、治療的介入のためのデバイス開発、そして、これらの基礎技術を臨床応用する医療工学までを研究の範囲とします。

このようなプログラムを実施して成果をあげるためには、同窓生の皆様をはじめ関係の皆様の絶大なご支援とご協力が不可欠です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

山口 隆 美
(バイオロボティクス専攻教授)

専攻の各講座は通常三〜四分野で構成されます。従来は一分野を、上級の教授・助教・助手からなる一研究室が担当してきました。新体制の最大の眼目は、一分野内を教授と助教からなる研究室と准教授の研究室に分けたことです。分野の運営責任を教授が負うことは以前と変わりますが、多くの点で若手教員の自立性が高められています。

まず、学部や大学院の学生配属は、独立した研究室単位で行います。学生の指導教員は、配属された研究室の教授又は准教授となります。これによって、准教授は配属された学生に対して自由に研究テーマを課し、主体的に研究を指導できるようになりました。特に、最先端の魅力的な研究テーマを持つ准教授は、外部から多くの入学希望学生を集めることが期待されます。一方で、同じ分野を構成する研究室は、合同ゼミなどにより協力して学生教育を行うことも求められます。最若手の教員と位置づけられる助教は、その育成によ

既にテレビ・ラジオ等のニュースでご存知のこととは思いますが、我が国で最初の医工学を専門とする新しい研究科が本年四月から東北大学に発足することになりました。

これまで東北大学では工学部と医学部の研究者が協同して新たな医療機器開発や医学・生物学の問題に取り組んできております。古くは大正十四年にさかのぼりますが、工学部の坂山平一教授と医学部の佐藤彰教授が真空管式高音聴診器を開発してあります。その後、超音波による心臓の断層像の撮影、X線CTの原理の提案など、世界に先駆けた医工学研究が行われてきました。

機械系においては、国立大学機械系で全国に先駆け平成三年四月から機械電子工学科の中に医工学関連の二分野が発足しました。また、機械系の改組により平成十五年四月にはバイオロボティクス専攻が発足し、生体医工学関係の研究と教育を先導してきました。この時をほぼ同じくして、平成十四年には、文部科学省の二十一年次COEプログラムに「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEプログラムでは、二十一年次COEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

「我が国初の医工学研究科—平成二十年四月より発足—」

このように新しい取組みにおいて、活力ある学生を教育し、世の中に送り出して行くためには、機械系の協力無しには出来ません。また、機械系同窓会におかれましても、新しい研究科の発展のためにも

本体制はスタートしてまだ一年を経過していませんが、これまでの所、順調に動いているように思えます。不具合が見つかった際は適宜見直し、所期の目的を達成できる体制にしていきたいと思います。

升谷 五郎
(航空宇宙工学専攻教授)

「我が国初の医工学研究科—平成二十年四月より発足—」

このように新しい取組みにおいて、活力ある学生を教育し、世の中に送り出して行くためには、機械系の協力無しには出来ません。また、機械系同窓会におかれましても、新しい研究科の発展のためにも

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

「我が国初の医工学研究科—平成二十年四月より発足—」

このように新しい取組みにおいて、活力ある学生を教育し、世の中に送り出して行くためには、機械系の協力無しには出来ません。また、機械系同窓会におかれましても、新しい研究科の発展のためにも

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配

東北大学グローバルCOE
「新世紀世界の成長焦点に
築くナノ医工学拠点」

機械系では平成十四年度採択の二十一年次COE「バイオナノテクノロジー—基盤未来医工学—」(拠点リーダー 佐藤正明教授)が平成十八年度に終了し、平成十九年度から後継のグローバルCOEプログラムとして、「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」(拠点リーダー 山口隆美教授)が採択され、今後五年間、大学院博士課程の教育・研究の充実のための活動を展開することになりました。グローバルCOEの経験を活かして、東アジア・環太平洋圏に焦点を絞った国際的協力関係を築くことに主眼をおいています。とくに、東アジアの先進的諸国（韓国、台湾、シンガポール）および大洋州の諸国（オーストラリア、ニュージーランド）に重点をおいて研究・教育の協力のための拠点を築きます。計画当初の三年間で、合計十三回の国際シンポジウムを東アジア・環太平洋の諸国でも開催し、大学院学生・若手研究者の積極的な交流を図ります。また、日英両語の定期刊行物や、インターネット上ですべての情報を配



東北大学 医工学研究科
Graduate School of Biomedical Engineering, Tohoku University
022-795-4824
me-kyomu@bureau.tohoku.ac.jp

革新的なテクノロジーの開発・推進と次代を担う人材の養成。それが、医学と工学の融合で生まれる新領域の使命です。

図の説明 医工学研究科のウェブページ (http://www.bme.tohoku.ac.jp/) の表紙

機械系フォーラム in Tokyo 2008

日時 平成20年5月9日(金)・5月10日(土) (2日間)
会場 アキバ・スクエア
〒101-0021 東京都千代田区外神田4-14-1 秋葉原 UDX 2階
TEL: 03-5296-1174 FAX: 03-5296-1899

主催 東北大学機械系
共催 ・グローバルCOEプログラム
「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」
・東北大学「医療工学技術者創成のための再教育システム」(REDEEM)プロジェクト

内容 ・機械系43分野、流体科学研究所21分野、多元物質科学研究所2分野の研究結果の展示・実演、新技術セミナー及びオープン講義の開講 など

連絡先 機械系広報推進室
・フォーラム担当幹事 伊澤 精一郎 TEL&FAX: 022-795-4099
〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉6-6-01
東北大学大学院工学研究科機械系
E-mail: forum08@fluid.mech.tohoku.ac.jp
・広報推進室秘書 菊池 智美 TEL&FAX: 022-795-4043
E-mail: tomomi_kiku@staff.mech.tohoku.ac.jp
URL: http://www.mech.tohoku.ac.jp

機械二十二年卒同期会

日時 平成十八年十月二十五日 十二時

場所 東京都文京区本郷 学士会館分館

出席者 児玉利夫 田中 博 谷口英一 島田平八 饒村長雄 川口邦供

交通機関の都合などで早い人は一時間近く早く到着し、ボルタ・ロッサ等で久闊を叙していたが、十二時前に全員顔を揃えたので席を改め、会食に入りました。

まず川口君が開会の挨拶を行った。続いて同君の発声で物故者の冥福を祈った。田中君の発声でクラス会の開催を祝って乾杯をして食事に入った。食事中、饒村君から欠席者の近況報告及び物故者について報告がされ、続いて出席者の近況報告が入った。川口君は奥さんが脳挫傷の後遺症の言語障害等でヘルパーさんに面倒を見てもらっており、本人も高血圧の治療をしながら仕事を続けているとのこと。田中君は再度の肺がん手術にもかかわらず前回同様の元気な姿で出席された。谷口君は出席者のなかで唯一健康で昔学生時代にやっていた高い山を登らないまでも近くの山や平地の歩きをやりており健康とのこと。一番元気そうであった。島田君は耳が遠く、目も悪くなり腰痛も出て段々無理が利かなくなり、奥さんも病気がとのこと。其のなか朝早く起きて新幹線、地下鉄を乗り継いで出席された。児玉君は体力もなくな

なり耳も遠くなりボケも出てきたので夫婦で油壺のホームに引っ越したとのこと。然し、油壺から夫婦でドライブしてきたのだから立派なものといえる。饒村君は奥さんの大腸癌は三回目の手術後再発せず元気に玉川温泉の岩盤浴に通っており、本人は拡張性心筋症のほか神経痛、老人性癡癡に悩まされているとのこと。また欠席者の近況報告は次の通りである。

赤井満雄君 小生や八十路入りで目に耳に、足、腰、お腹まであちこちに不順。何とか消光。皆様宜しく、ご伝声の程を。住所録、クラス会報告期待しています。事務所諸費相応分お知らせ下さい。宜しく願います。阿部 亨君 体調不良の為残念乍ら欠席。集会の様子できればお知らせ下さい。

大友俊男君 残念乍ら出席叶わず。失礼！ 西村泰正君 昨年九月中旬に脳梗塞、高血圧、糖尿病で入院し、経過も軽く、一時退院しましたが、腎不全で通院中です。経過もまあまあで長い養生を要します。故欠席させていただきます。皆々様によろしくお伝え下さい。松野 緑君 体調悪く残念ですが欠席しました。石郷岡英彦君(長男 聡) 平成十八年四月二十二日永眠致しました。生前に賜りましたご厚情に対し父になりにかわりまして御礼申し上げます。松田圭司君(松田敦子) 松田圭司 七月二十四日に亡くなりましたのでお知らせします。小生は十八年十一月以降は神経痛が段々悪化し十二月には二〇〇〇ほどの診療所までも三回休位まないと行けない状態になった。そのためワープロを打ち、報告を纏められるまで回復を待たら現在になって仕舞い、薄れた記憶を辿って纏めました。従って間違、忘れはどうかお許し願います。又老來のボケの所為でないと思いが馬鹿チョンカメラで写真撮ったが現像してみたらシャッターが切れていなかった。皆に大丈夫かといわれながら撮影したので皆さんに申し訳ない次第で此処にお詫びを申し上げます。



饒村長雄 (機械工学科22年卒)

機械三十年卒同期会

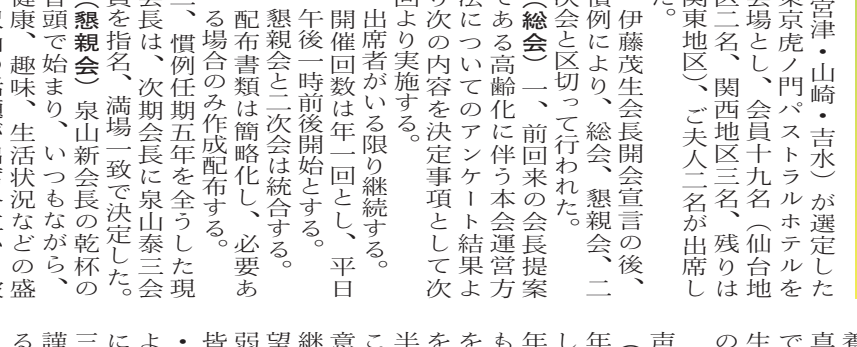
宮津・山崎・吉水)が選定した東京虎ノ門パストラルホテルを会場とし、会員十九名(仙台地区二名、関西地区三名、残りは関東地区)、ご夫人二名が出席した。

伊藤茂生会長開会宣言の後、慣例により、総会、懇親会、二次会と区切って行われた。

(総会) 一、前回来の会長提案である高齢化に伴う本会運営方法についてのアンケート結果より次の内容を決定事項として次回より実施する。

・出席者がいる限り継続する。開催回数は年一回とし、平日午後一時前後開始とする。懇親会と二次会は統合する。配布書類は簡略化し、必要ある場合のみ作成配布する。

二、慣例任期五年を全うした現会長は、次期会長に泉山泰三会員を指名、満場一致で決定した。(懇親会) 泉山新会長の乾杯の音頭で始まり、いつもながら、健康、趣味、生活状況などの盛り沢山の話題が出席各位から披露され、書画の勉強、趣味道楽の研究に励む方も少なくないようであった。



また山崎幹事が持参、回覧した教養部・機械工学科時代のモノクロ写真や、昭和五十年の池袋「麦香村」での会合(多分本会の初会で武山先生ご出席)の写真など若かりし時代の写真に回顧のひとときを持った。続いての二次会は、吉水幹事の発声で開始され、個別の談義に興じた。(今後の運営) 本会は、昭和五十五年より隔年、平成二年より毎年開催し、今回は二十五回目となる。同四年には本会の規約を作成し、出席数もご夫人を含めるとほぼ毎回二十名を超す出席者を確保し、確実に成長を遂げてきたが、会員が七十歳代後半になるに至り、運営形態を見直すこととし、前述のアンケートにより意見を求めた処、参加者がいる限り継続希望(六割)、毎年一回開催希望(八割) 平日午後開催希望(八割弱)、となり、会員諸氏の気持ちは皆若いのだと推察した次第である。今回は、伊藤幹事と遠路神戸よりご長女の押す車椅子で久方ぶりに出席し歓迎されたが、直後の六月三日に逝去されたことである。謹んでご冥福をお祈りする次第である。松山 孝弘 (機械工学科30年卒)

機械三十二年卒同期会

希望が寄せられたが、直前に用事が入ったり、体調を崩されて五名の方が欠席となった。流体研の施設見学をした後、史料館の展示室を訪問、昔懐かしい写真や展示物に感激の一時を過ごした。バスで成・亥年の守り神である国宝大崎八幡宮に参拝して、秋保温泉ホテル「クレセント」に向かった。

宴会では神山代表幹事・渡部幹事の挨拶に続いて、関会員の巧妙な司会によって宴会がスタートし、途中一人一分間のスピーチで近況報告がなされた。阿部幹事の中絶の挨拶で宴会はお開きとなった。場所を移しての恒例の二次会では、学生歌の合唱から始まり、各自の熱唱の続く「カラオケ」に老人パワーが発揮された。

翌日は青葉山キャンパスの機械系の施設見学をさせて頂いたが、訪問した研究室では熱心に説明して頂き、会員からの質問も相次いだため、予定を十分オーバーする見学会となった。終了後、観光バスで一路鳴子峡に向かった。平日にもかかわらず、鳴子に入ってから道路が混み始め、十二時五十分鳴子温泉のホテル「ますや」に到着。昼食を急いで済ませ、鳴子峡に向かった。あいにく鳴子峡の遊歩道は数日前に起きた落石事故のため閉鎖されていたが、展望台からの紅葉の眺めは素晴らしい。会員一同東北の秋を十分に満喫した。時間を大分超過したので、帰りは一路仙台を目指し、予定より十五分遅れとなったが、十五時四十五分仙台駅に到着、無事解散となった。有志十名ほどは、翌日開催のゴルフ大会を楽しんだ。神山 新一 (機械工学科32年卒)



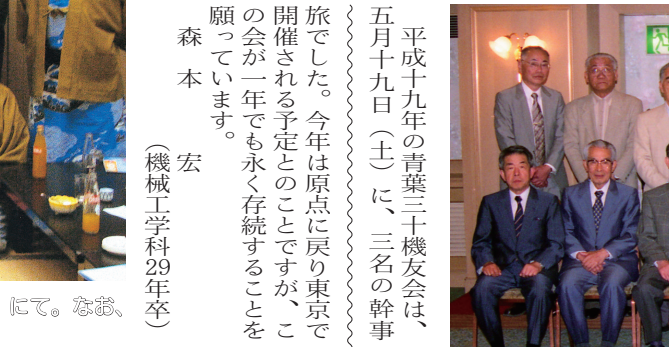
最近の出来事などを互に交歓したが、圧巻は代表幹事による再婚の報告であらうか。益々の若さで秘訣の源は、と問われて若い夫人が本人を若い衣服で飾ることと吐露。一同、羨望と祝福の喝采。見事な夜景を俯瞰し、紹興酒を傾けて中華料理を堪能して欲談しているうちに予定の時間となった。最後に来年の幹事を戸部俊夫さんと佐藤忠教さんにお願いし、再会を期して同期会を終えた。大野 庄康 (機械工学科31年卒)

機械二十九年卒同期会

昭和二十九年機械卒業の同期会(青葉五色会)の定例会合が平成十八年十二月三日に「かんぼの宿・焼津」(一泊)で開催されました。この会は今は亡き渡辺聰氏(ダイキン工業勤務)が昭和四十八年八月に立ち上げ、我々の世代に忘れることのない出来事(大詔奉戴日)をまた、この日に近い日を選んで毎年東京で忘年会を兼ねて定期的に開催し、現在も続いております。卒業三十周年あたりから五年ごとの年には仙台地区で開催してきました。昨年は東海・関西地区のメンバーにも参加し易いようにとの思いから前記の焼津での開催となりました。参加者は同様の奥方を含め総勢十三名でした。宿に到着前に焼津漁港を見学し、新鮮なネタを用いたお寿司を食べ、地元のバスに乗り込んだメンバー、地図を見ると駅から宿所ま

での水平距離は大したこともないの駅から徒歩でスタートしたものの宿所との標高差がかなりあるため途中で休みながら苦労して宿に到着したメンバーもありました。宴会は幹事代表の太田正孝氏の挨拶で始まり、また、御夫人方が同席されたこととあり、全員極めて紳士的に肅々と節度を保ちながら行われました。山の上には「かんぼの宿」一軒だけというところで二次会に行くこともなく極めて健康的な会合に終了しました。翌日は焼津駅近くのサッポロビールの工場見学に参加するグループや東名高速焼津インターの近くにある「焼津さかなセンター」方面に行くグループなどに分かれた。後日、聞くところによりますます我々のメンバーの一人がさかなセンター近くの鮮魚店で鮭の最高の大トロの大きな切身(ウン万円?)を買ったとい

う大物もいたようで、ビール工場見学のお土産に売店で「おつまみセット」を買った程度の私生活の「格差」を痛感した次第です。帰路、私は新幹線を用いることなく焼津→浜松→豊橋と在来線の普通列車を利用して更なる格差の増大が見込まれたが心に残る楽しい



青葉五色会定例コンパ(平成18年12月3日)「かんぼの宿・焼津」にて。なお、女性の隣の男性は必ずしも御主人ではありません、念のため。

機械三十一年卒同期会

平成十九年の青葉三十機友会は、五月十九日(土)に、三名の幹事旅でした。今年は原点到り東京で開催される予定とのことですが、この会が一年でも永く存続することを願っています。森本 宏 (機械工学科29年卒)

昨年の同期会は、卒業五十周年同期会として、懐かしい杜の都・仙台で開催し、また記念文集の発行と合わせて、卒業半世紀を記念するに相応しい画期的なものだった。今年はこの成果を受けて、更なる半世紀への一里塚とすべく、開港一五〇周年間近の横浜に場を移し、第一部「名所散策」(第一部「懇親会」の二部構成という趣向で行った。第一部は、秋晴れの絶好の行楽日和となった十一月八日午後一時、JR関内駅北口に参加者全員集合し、馬車道を通りながら神奈川県立歴史博物館見学、海岸通りに入り、日本郵船博物館見学、横浜税関、神奈川県庁を経て大根橋を渡り、山下公園前の産業貿易センターまでとした。先ず県立歴史博物館では、開館四十周年記念特別展「宋元仏画」が開催されていて、鎌倉の建長寺、金沢区の称名寺等に伝わる十六羅漢図、釈迦三尊像等、宋元時代の仏画(国宝、重文)を鑑賞した。次の見学先、日本郵船歴史博物館は時間の都合上視く程度となつてしまつたが、海運国日本の栄光と苦難

の歴史を垣間見ることが出来た。海岸通りを更に進み、横浜税関、神奈川県庁を左右に見てシルク博物館で左折し、大根橋に向かう。大根橋頭端からの眺望は素晴らしいパノラマである。開港以来日本の玄関として今日に至るその息吹を感じ、浜の微風に身を委ねながら全員で記念写真を撮った。帰りは山下公園を横切り、約一時間の散策を終えて懇親会場の産業貿易センタービルに到着。懇親会はビルの最上階十階の中華料理「東天紅」の一室を借り切り、二卓のテーブルに十三人が分かれて着席、本年五月黄泉の国へ旅立たれた八代重興さんへ黙祷を捧げた後、最も遠くから駆けつけた旭寿夫さんの発声で乾杯、代表幹事西尾宣明さんによる歓迎の挨拶の後談話に入った。今回特記すべき事は、榊原淳さんが数年来の大病を克服して元気に参加され、その胆力に一同驚嘆、そして勇気付けられた事である。又石澤榮一さんも久々の出席であった。幹事から欠席者の近況報告がまとめられて配布された。各テーブルでは

希望が寄せられたが、直前に用事が入ったり、体調を崩されて五名の方が欠席となった。流体研の施設見学をした後、史料館の展示室を訪問、昔懐かしい写真や展示物に感激の一時を過ごした。バスで成・亥年の守り神である国宝大崎八幡宮に参拝して、秋保温泉ホテル「クレセント」に向かった。宴会では神山代表幹事・渡部幹事の挨拶に続いて、関会員の巧妙な司会によって宴会がスタートし、途中一人一分間のスピーチで近況報告がなされた。阿部幹事の中絶の挨拶で宴会はお開きとなった。場所を移しての恒例の二次会では、学生歌の合唱から始まり、各自の熱唱の続く「カラオケ」に老人パワーが発揮された。翌日は青葉山キャンパスの機械系の施設見学をさせて頂いたが、訪問した研究室では熱心に説明して頂き、会員からの質問も相次いだため、予定を十分オーバーする見学会となった。終了後、観光バスで一路鳴子峡に向かった。平日にもかかわらず、鳴子に入ってから道路が混み始め、十二時五十分鳴子温泉のホテル「ますや」に到着。昼食を急いで済ませ、鳴子峡に向かった。あいにく鳴子峡の遊歩道は数日前に起きた落石事故のため閉鎖されていたが、展望台からの紅葉の眺めは素晴らしい。会員一同東北の秋を十分に満喫した。時間を大分超過したので、帰りは一路仙台を目指し、予定より十五分遅れとなったが、十五時四十五分仙台駅に到着、無事解散となった。有志十名ほどは、翌日開催のゴルフ大会を楽しんだ。神山 新一 (機械工学科32年卒)

最近の出来事などを互に交歓したが、圧巻は代表幹事による再婚の報告であらうか。益々の若さで秘訣の源は、と問われて若い夫人が本人を若い衣服で飾ることと吐露。一同、羨望と祝福の喝采。見事な夜景を俯瞰し、紹興酒を傾けて中華料理を堪能して欲談しているうちに予定の時間となった。最後に来年の幹事を戸部俊夫さんと佐藤忠教さんにお願いし、再会を期して同期会を終えた。大野 庄康 (機械工学科31年卒)



2007/11/8

機械三十五年卒同期会



コンパに集った同期の古希面々

卒業以来半世紀近く経つ。伊勢原にいる村上君から「百周年イベントが近づいて来た。我々同期の殆どが今年七十歳を迎え、時同じくして母校の大学が百周年になるという機会がめったにない。こまごまと生きたり来たりしたこともラッキーと感謝し、仙台で古希を祝おうというところになった。旅は道遠、一緒にはいかないか」とのメールが来た。渡りに舟であった。

二〇〇七年八月二十六日、仙台駅に関西や関東から石井、大槻、加賀、村上、千野の五名が集まった。新幹線「はやて」の乗車時間は上野から何と一時間三十分、我々の学生時代は東北本線でも常磐線でも八時間を超えていた。隔世の感だ。

牛たん焼を食べた。川崎の渡辺二君、在仙の佐々木進君も加わった。牛たんはいづから仙台の名物になったのだろうか。

宮城県民会館大ホールへ移動、東北大学百周年記念市民コンサートを聴いた。東北大学祝典曲「私達は進む」、ベートーベン交響曲第九番「合唱」何れもオーケストラと大合唱の迫力に感激。

感動の余韻を抱きながら懐かしい東一番丁を歩くと古希の祝賀会にいらした。あそこが古希の祝賀会にいらした。あそこが古希の祝賀会にいらした。あそこが古希の祝賀会にいらした。

昭和三十三年六月二十二日付の私の日記にこの片平の講堂で五十年記念式典があり、灘尾文部大臣、矢内原東大総長、滝川京大総長らの挨拶や講演があったと記されていた。しかし、このような壮大なイベントがあった記憶はない。あれから永い永い五十年、しかし、あつという間の五十年。そして母校が百周年。夕陽を浴びるころ、再び東一番丁を歩き青葉工業クラブ御用達と聞く割烹で古希を温めコンパ、在仙の青柳金森、坂本、杉山も加わって計十二名、卒業以来四十七年、夫々が日本技術の進歩発展に目覚ましい活躍を遂げた連中。今宵は静かに仙台の銘酒を飲みつつ、学生時代の思い出話に興じながらの歓談であった。夜も更けていった。

千野 甫
(機械工学科35年卒)

機械四十二年卒同期会

二〇〇七年二月二十四日機四十二年卒の同期会を銀座の仏レストラン「ロテスリカ」で開催した。湯河原温泉以来、十数年ぶりの再会であったため、当初は顔と名前が一致しないメンバーもいたようだが、石丸博氏の紹介で一流レストランのフランス料理で舌鼓を打ち始めると、すぐ学生時代の雰囲気になり、旧交を温めることができました。今回は同期会再立ち上げ目的としたので、メールアドレスが判明しているメンバーのみだったため、参加者は九名(石丸氏、佐藤好一氏、大光寺信夫氏、永井弘氏、長倉弘氏、新野紘三氏、二瓶充雄氏、坪内)と少なかつたが、学生時代の話題から孫の自慢話など、久しぶりに盛り上がりつつあった。参加者一同、気持ちだけは、まだ、若いつもりです。是非次回の同期会にご参加ください。

坪内 邦良
(機械工学科42年卒)



どのコメントが出されましたが、今回は是非参加したいとの意見が多く出されました。参加者一同、気持ちだけは、まだ、若いつもりです。是非次回の同期会にご参加ください。

坪内 邦良
(機械工学科42年卒)

機械四十九年卒同期会

同期会ネットワーク構築中
我々の年代は今年春で卒業以来三十四年が経ちます。五年ほど前から同期会を立ち上げようとの活動を始めています。きっかけは、望月浩君(セイコーエプソン英国現地法人勤務、機械系同窓会誌第十一号へ駐在記を寄稿)が帰国時に東京にて四十五人で開催するミニ同期会でした。当初の目標は卒業三十年を記念した仙台での同期会開催でしたが、幹事役を引き受けた筆者(星井勲、IHI勤務)の怠慢でいつの間にか三十年記念の春は通り過ぎてしまいました。昨年の秋のミニ同期会で再び奮起させられ、只今同期会メンバーの名簿作成中です。



からの名簿作りには予想以上の難しさに直面しております。同窓会事務局のご支援を頂きながら、昨春秋に二名の連絡先を探し出しました。この二名に昨年九月のミニ同期会の写真をメールで送りましたが、誰が誰かわからないとの反応でした。現在は、連絡を取れているメンバー間で機会ある毎にメールで現況の交換をしています。

この同窓会ニュースを利用して、昨九月のミニ同期会の写真を紹介させてもらいます。写真左から、望月浩君(セイコーエプソン英国、

機械五十七年卒同期会

大学卒業から二十五年
まず、仕事の近況を報告します。会社生活も二十三年を経過したが、その間、技術者として一貫してごみ処理施設の建設に携わって来た。重要な社会インフラの一つである、ごみ処理施設の建設を通して、社会に貢献する事が出来たと思っております。現在、ごみ処理施設は価格競争が激化し、私の勤める三菱重工業はこの分野では、必ずしも順調に業績が伸びているとは言えない。しかし、環境と調和し持続的に発展する社会を構築する為には、今後も欠かせない施設である事を考えれば、さら

来年大学入学が決まり、長男は高一と、まずまず順調に育っている。これは全て妻の努力の賜物と、今更ながらには妻に感謝したい。今後とも宜しくと言ったら図々しく感じるかな?

最後にクラス会近況です。我がクラス会に目を転じてみると、修士二年を経て社会に出てから二十三年過ぎたが、その間、初めの頃一回、十年過ぎに二回目があった後、我がクラス会が開かれていないのではないかと思う。連絡が来たら出掛けようという程度の関わりは不良会員なので、呼び掛けるのは気が引けるが、誰か冒頭を取ってそろそろやってもらえないだろうか。ついでに厚

高口 宙之
(機械工学科57年卒)

かましいお願いをすれば、場所は東京、横浜近辺だとっても有難い。おつて、実は私は現在、機械系同窓会の学理事である。その関係から、同窓会誌及び同窓会ニュースへの投稿者を紹介するよう、事務局からは忙しうらく、なかなか応じてくれない。そこで則を示す意も込め、今回投稿した次第である。従って、責務を果した人間からの要請であることを断言し、私からの投稿要請には、今後快く応じてもらいたい。尚、先輩、後輩の方々も対象である事を付け加えておきます。

松橋 博基
(機械工学科61年卒)

機械六十二年卒同期会

精密三十二年卒同期会
平成十九年(二〇〇七年)十月十四日(水)の午後六時から、精密三十二年卒業生は、宮城県南三陸町にある「南三陸ホテル観洋」で、第九回目の同期会を開催した。卒業後五十年を記念し、塩竈市在住の福来友康氏に会場の選定・ホテルとの交渉その他の世話をお願いした。宮城県の仙台「やまぼうし」以来四年ぶりに開催された。

出席者は十五名だった。前回(平成十八年十月二十五日)の東京小石川後楽園内・酒徳亭のときより、出席者は二名少なかったけれども、加藤 洋氏と河上 洋氏は、夫人とともに参加され、総勢十七名の同期会になった。

前回は今年までの一年間、仲間一人荒川正嗣氏(元富士通)が、平成十九年二月に心筋こうそくで亡くなったことが、残念な出来事であった。彼は、出席番号一番で、過

も多忙を極めるにも関わらず、七名の有志が駆けつけてくれました。中には卒業以来ご無沙汰の面もありましたが、幸いなことに各位見栄えは学生時代とそう大差なく、すぐに思い出すことができ、頭髪や容姿にいらぬ気遣いなしで学生時代に戻りに語り合いました。

流体力学・熱力学の権威を輩出し、歴史と伝統ある速研は、片平キャンパスのほぼ中心に位置し、機械・機械第二の両学部の出身者、中韓の留学生、更に企業、他の大学から編入された方等非常にバラエティに富んだ人材の学び舎でありました。

減員してしまおうアキデントもありましたが、楽しい夜は瞬間に終わるお開きとなりました。

親しい同期、先輩、後輩のつながりは、利害抜きで互いに親身になれる大きな財産であり、その輪をできるだけ広げたいと思います。

当記事をご覧になって「ああ、こいつらか!」と見覚え、または思い出して頂いた方は是非とも写真の顔ぶれ、または高口(Shiroyuki.koguchi@mhi.co.jp)、酒井(sakaki@okyo-gas.co.jp)まで連絡頂きますようお願い申し上げます。

高口 宙之
(機械工学科62年卒)

去八回の同期会のすべてに出席し、各人の近況報告に対して、いつも大きな声で応え、同期会の座を盛り上げてくれた。

同期会の会場になった「南三陸ホテル観洋」は、今年で創業三十五年になる。すべての部屋から海が見える。かきだの景色が、海面に変化を与えている。平日は、仙台駅東口の「代々木ゼミナール校」の前から、送迎バスが出ている。

われわれ十二名だけに乗せた送迎バス(二号車)は、一時三十分定刻に仙台を発車し、南三陸町にある「ホテル観洋」に向かった。車内では一年ぶりに会う仲間が、近況話をしていく。外の景色もあまり目に入らないほど、話に熱中している。途中、三陸自動車道の矢本パーキングエリアで小休止したあと、午後三時三十分ホテルに着いた。

今回の世話役の福来氏(塩竈市在住)は、すでに到着していた。部屋



一杯始める人、個室で休養をとる人、温泉に入り、めいめい宴会前の準備に時間を使った。午後六時から、「竹島の間」で宴会会が始まった。福来幹事のあいさつ・世話人八戸のあいさつ・献杯のあと歓談になった。印象に残ったのは廣安博之氏(ヒ

八戸 信昭
(精密工学科32年卒)



写真左より酒井(谷研)、樹田(橋本研)、都丸(高山研)、杉本(奥、谷研)、鈴木(手前、相原研)、森(精密)、下森(高山研)、高口(相原研)

機械系より提案していただきました新しい大学院教育プログラムである「機械工学フロンティア創成」が、平成十九年度文部科学省・大学院教育改革支援プログラムに採択されました。同プログラムは、大学院博士課程、修士課程を対象として、優れた組織的・体系的な教育取組に対して重点的な支援を行うことにより、大学院教育の実質化を推進することを目的とした三年間のプログラムです。航空宇宙工学専攻では、平成十七・十八年度二年間、文部科学省・魅力ある大学院イニシアティブプログラムにて「フロンティア実践による航空宇宙フロンティア」を実施してまいりましたが、今回のプログラムはこれを機械系全体に拡大したものです。採択されたプログラムでは、以下の二つの新しい教育を実施します。

大学院教育改革支援プログラム「機械工学フロンティア創成」について

まず「機械工学フロンティア」と名づけた授業科目を導入しました。同科目では、大学院に入学直後の学生に対し、機械システムの設計と創成に必要な一連のプロセスを体験的に習得することを目的とした実践的な授業を行います。学期の前半では、システム・インテグレーションやプロジェクト・マネージメント、安全管理に関する授業を行います。学期の後半では、プロジェクト研修として、各研究室の指導のもとにチームを構成し、提案書の作成、概念設計、設計審査、プロトタイプ試作などを行います。プロジェクト各フェーズでレビュー会、審査会を開催してチームごとにプレゼンテーションを行わせ、学期末にはレポートを作成させて、これらに基づいて成績評価を行います。

特に、国内外の研究機関や企業に赴いてプロジェクト実践的な共同研究を行うことを推奨し、必要な支援を行います。修士課程の修了認定については、本研修の成果を修士論文としてまとめ、論文審査を行います。平成十九年度には、「機械工学フロンティア」につきましては「フロンティア」および「ロボティクス」をキーワードとしたプロジェクトを実施し、五〇名の学生が受講しました。学期末には自律飛行機にチャレンジしたグループを中心に四名の学生（修士一年生）を選抜して米国バドュー大学に派遣し、同大学の学生とともにATAA主催の Design Build Fly コンテストに向けて共同作業を行いました（写真参照）。平成二十年度以降は、機械工学の各分野へ同様な実践的教育活動を展開していく予定です。また「イノベーション創成研修」につきましても、平成十九年度には四名の学生（修士一年生）を海外にイン



米国バドュー大学でのモデル飛行機フライト実験

外にイン ターネットを派遣し、この数は今後はますます増えていくと思えます。早い時期に海外での研究活動を体験させること

とは、博士後期課程へ進学して更に研究を深めようという学生のモチベーションを高めることにつながると期待しています。このように、機械系では、長期インターンシップや海外プロジェクト研究などを実践させることにより、産業界や国際社会の現場に精通し、現場の中から問題点を見出しそれを解決する能力と経験に優れた人材の育成に力を注いでいます。同窓生の皆様のもとへ学生がインターンシップ研修において、そのような機会があるかと思えますし、そのような機会の中から新たな共同研究が生まれてくるのではないかと考えております。どうぞ、様々な角度からご支援を賜りますようお願い申し上げます。 (プログラム・ホームページ <http://www.astro.mech.tohoku.ac.jp/MechFrontier/>) 吉田 和哉 (航空宇宙工学専攻教授)

東北大学男女共同参画奨励賞の受賞について

男女共同参画の重要性が認識されつつある中、機械系でもさまざまな取り組みが進められています。過日、これらの活動が先導的なものであるとして評価され、機械・知能系男女共同参画推進委員会、同WGおよび女子学生交流会スタッフの連名で、平成十九年度東北大学男女共同参画奨励賞（沢柳賞）を受賞いたしました。この機会に、その活動についてご紹介させていただきます。機械系では平成十七年度に男女共同参画準備WGを設置し、男女共同参画に関する意識調査や設備環境に関する希望調査などをアンケートに基づいて行うとともに、さまざまな活動の立ち上げを行いました。翌十八年度には機械・知能系の常置委員会として男女共同参画推進委員会を発足させ、活動を展開しています。その内容は多岐にわたりますが、大別して、啓蒙・広報活動、環境整備活動、次世代育成のための活動を行っています。

啓蒙・広報活動の一環としては、女性向けの機械系ウェブページ women@mech.tohoku.ac.jp を立ち上げ、委員会の活動内容や設備に関する情報のほか、後述する交流会のお知らせや女子学生に対するキャリアパスの紹介など、幅広い情報提供を行っています。環境整備に関しては、アンケート結果に基づいて、女子トイレの増設、シャワートイレの設置などを進める一方、二十四時間使用できる女子静養室の設置を行いました。現在、機械系一学部と共同棟にそれぞれ一室ずつ運用されており、夜間でも安心して利用できるようオートロックによる安全性確保を図るとともに、気軽な休養場所としても利用できるよう整備されています。次世代育成のための活動としては、月一回のペースで女子学生交流会を開催しており、少人数ゆえに孤立してしまいがちな女子学生が研究室や学年の壁を越えて気軽に語り合える場となっています。卒業や入学などの節目の時期には、青葉記念会館やこもれびカフェで比較的大規模な集いも催しています。なお、これらの会の開催には機械系同窓会ならびに青葉工業会よりご支援を頂いておりますことを申し添え、ここに御礼申し上げます。

同窓会の皆さんご存じのように流体科学研究所の前身、高速力学研究所は、一九四三年十月六日に工学部機械工科学科力学実験室を母体として設置され、以来六十四年工学部機械系と運営、人事交流、学部・大学院教育に強い連携の元に発展してきました。現在では、流動に関する学理およびその応用研究を推進する十六研究分野から構成される四大研究部門（極限流、知能流システム、マイクロ熱流動、複雑系流動）および流体科学を基盤とした航空、医療、ナノテクノロジー等と融合化を促進し、主にプロジェクト研究を推進する八研究分野の流体融合研究センターから構成されています。また、実験計測とコンピュータシミュレーションを融合する国内有数のスーパーコンピュータ、衝撃波発生装置、さらには、宮崎には曳航風洞を有する国内唯一の流動の学理と技術に関する大学附属研究であります。

機械系広報推進室の開設

平成十九年度より機械系広報推進室が発足しましたので、その活動内容を報告します。広報推進室の基本的な役割は、機械系ホームページ (<http://www.mech.tohoku.ac.jp/>) の維持管理や更新、七月末のオープンキャンパス実施内容のアレンジや配布資料作成、高校生相手のオープン講義の企画や実施、高校から依頼される出前講義の講師選出、そして瀨名秀明特任教授の活動支援やホームページ「瀨名秀明がゆく」 (<http://www.mech.tohoku.ac.jp/sana/>) の手伝い等です。これら對外広報活動は、昨年度までは系長室や各委員会等に分散していましたが、広報推進室でまとめることで戦略的に活動することを目指しています。平成十九年七月からは広報推進室秘書として菊池智美さんが就任され、メルマガジンを開発するなど活発に活躍されています。

広報の対象としては産業界と受験生がいますが、前者は産学連携室が研究室見学や広報誌を発行するなどの活動が主体となり、国際交流および学生が一体となり、国際交流活動に貢献しています。以上、全国の附置研の中でも本研究所の国際交流活動の多様さと活発さは、特筆に値するものであります。産学連携および社会還元では、平成十六年六月に締結された研究協力包括協定に基づき、JAXAと本研究所が成果を挙げているスペースコンを活用した数値計算の分野を中心に、未来航空技術提案のための共同研究を実施し、これまでJAXAと共催で流体情報国際シンポジウムを開催し、その成果も発信しています。その他、産学連携をより活発に実現性のあるものにするために、民間企業から特任教授を任用し、産学連携交流会開催や共同研究推進を強化し、自動車、電気機械関連の企業に対し、研究成果を還元しています。また、独立行政法人化後の強化された活動として、国家レベルの研究助成制度に精通した特任教授の任用による外部資金獲得戦略の強化と広報担当として企業から特任教授を任用し、本研究所活動を学会や社会に分かり易く宣伝活動を行っています。

独立行政法人となり、最近では社会還元、拠点化および財政面から附置研に対し文部科学省からも厳しい注目が突きつけられております。本研究所ならではの特色ある活動を簡単に紹介いたします。研究戦略構想委員会を立ち上げ、本研究所の長期目標は、「流体科学の基礎研究とそれを基盤とした先端技術領域との融合ならびに重点先端技術分野への応用によって、世界最高水準の研究を推進する」こととします。これを現実にするためには、流体科学の既存研究分野を縦系に、これらの分野を横断するエアロスペース、エネルギー、ライフサイエンス、ナノ・マイクロテクノロジー研究クラスターを横系とする新たな研究体制を構築し、各クラスター長の下で融合領域研究への展開を開始しました。大型の外部資金導入も視野に入れ、超音速の複葉機「みそら」の開発、プラント高経年



受賞記念講演を行う松島紀佐准教授 (航空宇宙工学専攻) (写真提供：東北大学女性研究者育成支援推進室)

どの活動をしており、広報推進室は後者、つまり高校生や他大学学生およびそれら学生の父兄等への広報に重点をおいています。今年度のオープン講義等は機械系ホームページをご覧ください。広報活動の一環として、今年五月九日（金）、十日（土）に、東京秋葉原に新しくできたアキバスクエアにて展示会（機械系フォーラム「東北大陸」）と東北大・最先端メカ技術アキバに集結（仮称）を開催することとし、その準備を広報推進室が中心になって進めています。機械系フォーラムは二〇〇三年と二〇〇四年に東京大田区の産業プラザP10で開催し、機械系同窓生の皆様にもたくさん参加していただきました。四年振りに東京での開催ですが、この間の研究活動の進展を一般に公開することを目的としています。一日目（金曜）は、様々な企業の方に対して新技術セミナーを行います。夕方には産学連携室との共催で懇親会も開催する予定ですので、同窓生の方々にも是非ともご参加されたいと思います。

おおよび学生が一体となり、国際交流活動に貢献しています。以上、全国の附置研の中でも本研究所の国際交流活動の多様さと活発さは、特筆に値するものであります。産学連携および社会還元では、平成十六年六月に締結された研究協力包括協定に基づき、JAXAと本研究所が成果を挙げているスペースコンを活用した数値計算の分野を中心に、未来航空技術提案のための共同研究を実施し、これまでJAXAと共催で流体情報国際シンポジウムを開催し、その成果も発信しています。その他、産学連携をより活発に実現性のあるものにするために、民間企業から特任教授を任用し、産学連携交流会開催や共同研究推進を強化し、自動車、電気機械関連の企業に対し、研究成果を還元しています。また、独立行政法人化後の強化された活動として、国家レベルの研究助成制度に精通した特任教授の任用による外部資金獲得戦略の強化と広報担当として企業から特任教授を任用し、本研究所活動を学会や社会に分かり易く宣伝活動を行っています。

平成十九年度通常総会予告
平成十九年度通常総会は、平成二十年五月十七日（土）東北大学さくらホール（片平キャンパス内）にて開催されます。多数のご出席を御願ひ致します。
記
日 時：平成二十年五月十七日（土）
会 場：東北大学さくらホール（片平キャンパス内）
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1
※会場についてのお問合せは下記事務局までお願いします。
<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/sakura/newpage1.html>
次 第：10:30-12:30 流体科学研究所 研究室見学
13:00-14:00 総会
14:00-16:30 特別講演会
(講師：秋田市長 佐竹敬久様 / 東北大学教授 内山勝先生)
※詳細は別紙にてご覧下さい。
16:30-18:30 懇親会
会 費：8,000円（年会費2,000円を含む）
連絡先：東北大学機械系同窓会事務局 武井康子
(月・水・金 10:00-16:00)
Tel/Fax: 022-795-6926
e-mail: dousou@mech.tohoku.ac.jp
<http://www.mech.tohoku.ac.jp/dousou/>



編集後記
同窓会ニュース第13号をお届けいたしました。機械系の活発な活動をご周知頂き、今後ともご協力頂ければ幸いです。最後になりますが、原稿の執筆にご協力頂いた皆様、誠に御礼申し上げます。(岡部 朋永)